

## 貨幣乗数からエコネントロピーへ

早稲田大学 新澤雄一

周知のように、1921年にC.A.ファイリップスが、“Bank Credit”で現金通貨と預金との間に信用創造の考え方を提出して以来、信用創造および、いわゆる貨幣乗数(Money Multiplier)的思考が研究されてきた。とりわけ、1963年に、M.フリードマンとA.シュワルトが、ハイパワード・マネー(H)とマネー・サプライ(M)の関係を記述した「貨幣乗数  $M/H$ 」=「信用創造係数」の関係式を提案してから、「貨幣乗数」に対する同工異曲の文献や、説明が多い。我が国でも、フリードマン流の関係式が批判無しに受入れられているようであるが、L.C.プライヤントは、フリードマン流の関係式を単なる比率関係を示すに過ぎない「マネー・サプライ過程の最もけちな接近法(The most parsimonious approach)」と批判している。

報告者自身、1961年に、「通貨供給の一考察」と題して、経済主体を5セクターに分け、経済価値が、その真の所有者の手を離れ、金融資産に化体し、生産が行われ、生産物の価値の分配が行われ、入手した所得は、第一の決意によって消費と貯蓄とに分けられ、貯蓄された部分は、第二の決意によって、手許に置かれるか、金融機関に還流するとして、5部門の貸借対照表と損益計算書の結合勘定を、国民経済に応用して、信用創造と投資乗数とを結合した結合乗数の原形を発見して発表した。更に投入された一単位の貨幣  $Z$  が、経済社会でどのような働きをするか、経済主体の行動性向によって精密化し、ケインズの投資乗数  $k$  と一般化した信用創造係数とを結合した一般化した結合乗数を導き、「貨幣乗数」と名づけた。また本年、更に「貨幣乗数」を内包する体系として、経済体系を熱力学のエントロピー的分析によって考察した。

本報告では、第一に貨幣乗数について、第二に結合乗数について述べ、フリードマンの「信用創造係数 = 貨幣乗数  $M/H$ 」と「結合乗数 = 貨幣乗数」とを比較吟味し、「結合乗数」の「信用創造係数」部分で「貨幣乗数  $M/H$ 」を説明することによって意味のある関係式を導出し、第三にさらにエントロピー的分析とどのように関わるかを、所得速度などを巡って論じ、エコネントロピー  $E$  について、基本貨幣  $H$  による  $EH$  と乗数に対応した流通貨幣  $M$  による  $E$  の関係を明示し、結合乗数こそが貨幣乗数を主張できるのではないかということを論ずる。

(1) 新澤雄一【通貨供給に関する一考察】バンキング、1961年、産業経済社

(2) 新澤雄一「投資乗数と信用創造係数との結合乗数について」早稲田商学第360-3

61 合併号, pp211 - 240, 1994年9月

(3) 新澤雄一「貨幣乗数の定義的展開について」早稲田商学第 371 号, pp325 - 348, 1997 年 2 月

(4) 新澤雄一「単位貨幣のエントロピー的分析について」早稲田商学第 381 号、pp65 - 92, 1999 年